

## 〈症例研究〉

小林 隆児\*\*\*\*, 井上 玲子\*\*, 稲岡 勲\*\*\*

### 高機能広汎性発達障碍のリスクをもつ1歳男児に現れた原初的身振りの意味の検討

児童青年精神医学とその近接領域 48(3):353-369 (2007)

これまで発達障碍にみられるコミュニケーションの問題は、基本的に子ども自身の個体能力面の障碍として捉えられ、援助方法もいかにして子ども自身のコミュニケーション能力の獲得を目指すか、という視点から捉えられてきた。通常、コミュニケーションは言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションに二分され、その媒体として話しことばと身振りが機能している。これまでコミュニケーションの援助の方策として、話しことばや身振りを子どもに身につけさせるために種々の方法が開発されてきた。そこではこれらのコミュニケーションの媒体が子どもと養育者を初めとする他者との対人交流の蓄積の中でいかにして獲得されていくか、その発達過程についてほとんど検討されてこなかった。

本稿の目的は、発達障碍の子どもに現れた原初的身振りの意味の検討である。対象として取り上げたのは、母子間の愛着形成に深刻な問題を持ち高機能広汎性発達障碍のリスクをもつ1歳男児とその養育者である。われわれはその事例を母子間の関係障碍としてとらえ、関係発達支援の立場から臨床的関与を持った。

支援の過程で当初認められた動因的葛藤に基づく自傷という行動(障碍)は、関係欲求をめぐるアンビバレンスの緩和によって次第に消退していった。興味深いことに、その支援の過程で葛藤に基づく行動(障碍)は消退したが、その後まもなく関係欲求に基づく自己表現として自傷類似の行動が出現した。最初偶発的に床に頭を打ちつけた際に、みんなに注目され母親に抱っこされるといふ心地よい体験をした。その直後、彼に再度同じ体験をしたいという欲求が強まり、その表現型として〈床に頭を打ちつける〉という行動が出現した。そこには原初的知覚様態とその体験様式が深く関与していると考えられた。このような身振りの原初的形態は、その独特な表現型によりその意味を容易に捉えることは困難で、文脈を読みとることによって初めてその意味を理解できるという、極めて文脈依存性の特徴であった。よって、その意味を捉えるためには、その行動がどのような背景の中で起こったものか、その状況や体験の内容を理解していくことが不可欠であることを述べた。さらに、身振りの原初的形態がその後どのような過程を経て通常的身振りへと変容していくかについても検討し、私見を述べた。

これまで発達障碍に対する援助戦略は、さまざまな能力を獲得できるように子どもに発達課題を教えていくということに力点が置かれてきた。今回明らかになった身振りの生成過程に関する知見から、子どもたちの気持ちのありよう、つまりは彼らのこころの発達に焦点を当てた臨床的関与の重要性が示唆された。

**Key words** : ambivalence, attachment, gesture, motivational conflict, primitive communication, relationship disturbances, vitality affects

\*東海大学健康科学部社会福祉学科  
e-mail: ryuji@is.icc.u-tokai.ac.jp

\*\*東海大学健康科学部看護学科

\*\*\*泊江のんびりクリニック

## I. はじめに

これまで広汎性発達障碍の子どもをはじめ、対人的な関わり合いにさまざまな困難を抱えた子どもや成人への治療や援助は、その困難が本人自身の対人的関わりに必要な能力の障碍に起因するとする観点から、話しことばの獲得を目指す、コミュニケーションの代替手段の獲得を目指す、等々、関わり合いに必要な能力の獲得に向けた働きかけの戦略が採られることが多かった。

しかしながら、関わり合い（コミュニケーション）を二者関係として捉える立場からは、広汎性発達障碍の子どもとその子どもにかかわる人たちとのあいだに生じる関わり合いやコミュニケーションの困難は、一方的に子どもの側のコミュニケーション能力の欠如にのみ帰属させられてよいわけではない。かかわる側の関わり合いの質と、関わり合いの展開の経過もまた、そのコミュニケーションの困難と深く結びついているはずだからである。

そもそも、発達障碍というときの障碍は、発達の途上で生じてくるものである。そうである以上、それはその後の発達過程に影響を及ぼし、周囲との関わり合いのありよう如何では、二次的、付加的に障碍を増幅させる可能性をもつとともに、逆にそれまでの障碍（症状）が軽減される可能性をもつものである。つまり、その障碍（症状）は、生得的、器質的な障碍（基礎障碍）から直接派生したというよりは、その成長過程において形成・発現し、またその後も多様に変化していく性格のものである。実際、この種の障碍の子どもに認められる種々の能力障碍は、生誕直後から顕在化することはまずなく、養育者を初めとする他者との濃密な関わり合いの体験とその基礎障碍とが絡み合うことによって形成される（小林, 2001, 2004）。それゆえ、この子どもたちに特有とされるコミュニケーションの困難の問題は、まさにいまの議論の枠内で検討されるものでなければならない。

上記の議論をより一般化して言えば、われわ

れ発達障碍臨床にかかわる者は、まずもって以下の課題を明らかにしていかなければならない。

第1に、現在子どもに見られる多様な障碍（症状）は、いかなる関係性の蓄積の中で生まれてきたものか、第2に、多様な障碍（症状）は、いかなる関係性の蓄積の中で消退ないし改善し得るのか、第3に、コミュニケーション的關係を構築していくのに必要な表現意図および表現形式は、いかなる関係性の蓄積の中で子どもに生起してくるのか、の3点である。

本稿では上記の課題を考察していくための基礎資料として、広汎性発達障碍のリスクをもつ子どもの1事例を取り上げ、子どもと養育者の関わり合いの中において、子どもの側に身振りの原初のかたちとおぼしきものが現れてきた経緯を報告する。

## II. 研究方法

### 1. データの収集方法

われわれの関係発達臨床の実践と研究の場である Mother-Infant Unit (MIU) (小林, 2000) では、養育者との間に深刻なコミュニケーションの問題をもつ事例について、子どもとその養育者をひとつのユニットとして捉え、その関係性に着目しながら支援を実践している。通常、実際の臨床の場には、主援助者と主に子どもにかかわる共同援助者が関与するが、その他隣りの観察室にて、他のスタッフがセッション全体をビデオ録画しながら観察し、セッション後に時間を掛けてスタッフ全員で検討を加えている。その際、臨床的に直接関与しながら観察する (Sullivan, 1954) だけではなく、その場で起こっている事象を可能な限り客観的に把握するという作業がぜひとも必要になる。そのため、われわれは観察室で臨床場面をビデオで録画し、そのデータをもとに実際の臨床場面であれわれが気づかないところで起こっている事象について可能な限り把握するように努めている。

本稿で提示する臨床素材は、関与観察による臨床実践記録と、ビデオ録画データによる行動観察記録である。この双方向からの観察記録に

よって初めて原初段階での関わり合い(コミュニケーション的關係)についての詳細な検討が可能になる。なお、臨床実践記録の方法はエピソード記述(鯨岡, 2005)によっている。

### 2. 母子間の関わり合いの特徴(質)に関する初期評価の方法

関わり合いに焦点を当てて事例を捉える際に、その質的評価の枠組みとして、初回時に新奇場面法(Strange Situation Procedure; SSP)(図1)(Ainsworth et al., 1978)を実施している。この中で、われわれは愛着パターンを評価するのみならず、特に母子間の分離と再会時に示す両者の関係のありようを詳細に記述して

検討している。

### 3. 臨床事例に対するわれわれの支援の基本的考え

われわれはこれまでの臨床実践を踏まえ、実際の事例に対する支援の基本を以下のように考えている。

発達障害の子どもと関与する人とのあいだに関わり合いの難しさもたらされる最大の要因は、われわれの臨床経験から導かれた仮説的な考えによれば、子どもの関係欲求をめぐるアンビバレンス(相手を求めたい気持ちがあるにもかかわらず、実際には回避してしまう)(図2)(小林, 2004)と、それと結びついて現れる養

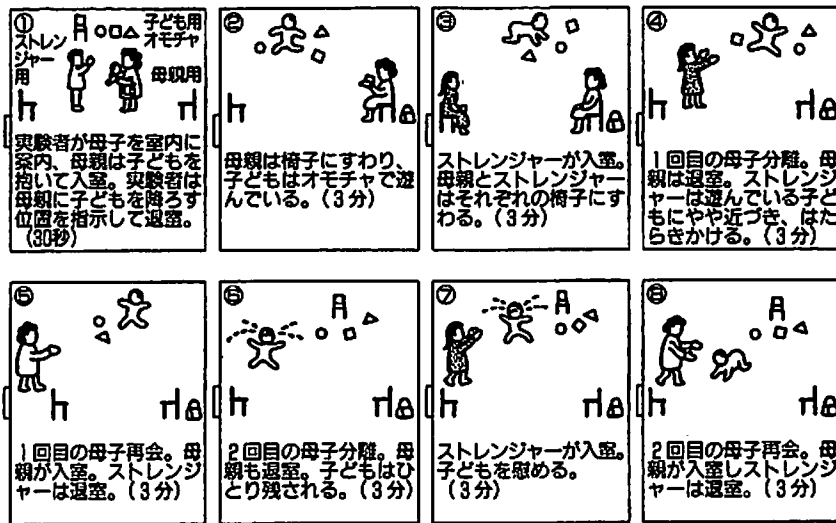


図1 新奇場面法(柏木ら, 1996)

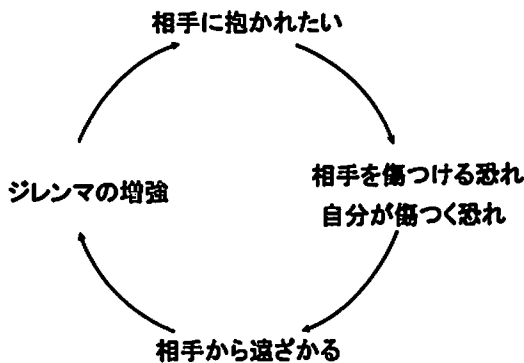


図2 関係欲求をめぐるアンビバレンス

育者の側の子どもにかかわるのが難しいという感じである。それゆえ、臨床の要となるのは、このアンビバレンスを緩和するように働きかけることと、養育者の側の負の感情および負の関わり方の低減である。言い換えれば、両者のあいだに生まれた悪循環を断ち切ることである。アンビバレンスを緩和する働きかけの中心は、それまでの過干渉的な対応をできるだけ控え、子どもの関心の向かうところを丁寧に受け止めることである。

この対応が功を奏すると、子どもの関係欲求が前面に現れやすくなり、その結果、子どもの気持ちの動きを掴みやすくなる。子どもの気持ちが養育者に掴みやすくなることによって、養育者も子どもの気持ちを受け止めることが比較的容易になり、当初の関わりが難しいという感じが薄れ、好循環が生まれる端緒が切り開かれる。その中で子どもに少しずつ安心感が育まれていくようになると、子どもは外界に対して好奇心を持ち始め、積極的に外界との関係を持ち始めるようになる。

子どものそうした肯定的な姿は養育者の喜びとなり、養育者の前向きな育児姿勢を強めて、子どもとのあいだで何かを共有しよう、子どもの気持ちに添おうという姿が増えてくる。こうして好循環が本格的に巡り始めるが、その中で、関係欲求の高まりとの関連で、子どもの側にさまざまな表現意欲が湧いてくる。

以上が、支援の基本と支援の結果についてこれまでのわれわれの臨床から得られた知見の骨子であるが、このような理念に基づく支援をわれわれは関係発達支援（小林ら、2005）と称している。

#### 4. 事例の提示の意図

われわれはこのたび、乳幼児期早期に発達障碍のリスクを疑われた関わり方の取りにくい子どもとその養育者に臨床的にかかわる機会を得た。その臨床の過程において、われわれの関係支援によって子どもと養育者との関わり合いの質が改善されていったが、その経過の中で、そ

れまでの悪循環の中で抑えられていた子どもの関係欲求が次第に高まることが観察され、その中で身振り表現の原初の形とおぼしきものが生じてきた。本稿はそれを取り上げると共に、その原初的身振り表現の意味を提示しようと試みるものである。

### III. 事例提示

T男 初診時1歳0カ月

〈家族構成〉

会社員の父親、専業主婦の母親、T男の三人家族。

〈生育歴〉

胎生期、切迫流産しそうになったことがある。新生児期、泣き声が弱かった。3カ月、あやしても笑わない。抱くと全身固くして緊張が高い。おなか为空くと泣くが、母乳をやるとすぐにおとなしくなって寝る。首が坐ってから立って抱きをしてもらいたがり、母子の肌が触れ合わない。抱っこしようとしても自分から身体をひねって、母に背を向ける。4カ月、寝返りやずりばいをしていた。自分から抱っこを要求しない。おすわりもまったくしないで、すぐに立とうとする。じっとしておらず、いつも落ち着かない様子であった。6カ月、歩行器を使わせると終始機嫌はよく、ひとり遊びのことが多い。8カ月、つかまり立ちができるようになると、その数日後には手を離して一人歩きをするまでになった。授乳時、母親が「おいしい」と声を掛けたら、いきなり顔を叩かれた。止めようとしたら、さらに激しく二度も叩かれてショックを受けたこともあったという。12カ月、関係がとれにくいという母親の不安から、某小児科クリニックを受診し、そこで筆頭筆者（小林）のもとに紹介されてきた。

日頃からT男は母親と視線を合わせない。ただよく見ていると、単に視線を合わせないというよりも、遠くにいればこちらに気を引く行動をとるが、いざこちらが働きかけると避けるようにして視線を反らし、他のことに気移りしてしまうという。母親が他のことをしていると、

なんとなくこちらを意識して相手をしてもらいたそうにしているが、いざ母親が相手をしようとする、視線を反らし、ひとりで他のことをしてしまおうということにも母親は気づいていた。

#### IV. 母子間の関わり合いの初期評価

〈SSP での様子〉(以下の○付き数字は図1の各場面を示す)

②母親はT男に対して積極的に関わろうとするが、T男はそれに対して母親の接近からすり抜けるように他のことに関心が移っていく。そのため母子間で交流が芽生えない。T男は母親に対して回避的行動が顕著。T男のみに着目すると、マイペースで落ち着きがなく、多動であるという印象を受けるが、母子の関係性に着目すると、母親の焦燥感からくるT男への接近はT男には侵入的に映り、T男を回避的行動へと駆り立てているように感じられる。

③母親がビニールトンネルに入ってT男と一緒に遊ぼうと促すと、少し興味を示しながらもすぐに離れて一人でボールを手を持ってうろろと動き回り始める。その時、stranger (ST) が入室するが、動き回っている最中にSTの存在に気づく。一瞬視線が合いにっこりするが、すぐに表情はなくなってしまう。ただその後すぐにわざわざ遠くに置かれていた(ビニール製の大きな)フープをひとつ手に取り、STの方に向かってフープを持った腕を伸ばして手渡そうとする。それを見て母親も子どもに促すように〈どうぞ〉と声をかける。T男はぎこちない足どりで懸命になってSTに自分から近づき、フープを手渡す。しかし、STにフープを手渡すと、すぐに何もなかったように他の遊びに気が移っていく。

他者への関心はあるが、それは瞬間的なもので、それが持続して何らかの対人交流へと発展することはない。そのためT男の情動反応には余韻がなく、情緒的交流も生まれえない。一見とても人なつこい印象を与え、愛想よいように見えるが、それはわれわれの表面的な印象であ

って、T男が自らの好奇心に動かされて意図的に関わろうと振る舞っているとはとても思えない。

④それまで積極的に働きかける母親に対して回避的反応を示していたT男であったが、母親が退室するとすぐに気づいて、母親の姿を目で追ひ、ドアまで追いかける。ドアが閉まり母親の姿が消えると、明らかに困惑した表情になるが、強く泣き叫ぶことはなく、少しぐずるような弱々しい声を時折発するだけである。口は閉じられていて、発声そのものを抑えているように見える。音に急に敏感になって周囲の様子をさかんにうかがい、何か音がするとその方向に近づいていく。STが抱きかかえてあやしても泣きやむ気配はないが、一貫して泣き方は弱々しく、こちらに訴えかける強さはさほど感じられない。抱かれたままT男はきょろきょろと周囲を見渡していたが、自分から降りてソファに置かれていた母親のコートを手にとってぐずり出す。STがぐずるT男をなんとかなだめようと努めていた時に、母親が入室してくる。

⑤母親が入室すると、すぐに母親の方に接近して自分から両手を伸ばして抱かれようとする姿勢をとる。この時、すでにT男の視線は母親を回避するようにしてドアを開けて母親を誘導したスタッフの方に注がれている。すぐに母親はT男を抱き上げるが、T男は母親にしっかりと抱きつくことはなく、両腕は下の方に下げたままである。T男の視線は退室しようとするSTの方にずっと向けられている。弱々しく発していたぐずり声もすぐに止んでしまう。10秒ほど抱かれていたが、すぐに再び先ほどと同様なぐずり声を出して自分から下りてしまう。その後もずっと機嫌のよくない状態で、終始ぐずっている。周りにある玩具に興味を示して扱い始めても母親が積極的に関与すればするほどT男は回避的な行動を取ってしまう。その後、次第にT男は甘えたような泣き声を出し始め、母親を求め始める。

⑥母親がT男を置いて退室しようとする、T男は母親の洋服の裾を引っ張るようにして母

親を求めている。そのため母親はT男をひとりにして退室することをためらいT男の相手をしていたが、こちらの指示でT男を床に寝かせて、母親ひとりで退室してもらおう。するとずっと泣き続けるが、しばらくの間は床に寝たまま、母親を追い求めることはない。泣き方も弱々しく、訴えかける強さに欠けている。しかし、次第に泣き方は激しくなって、まもなく起きあがって母親を求めて動き回る。泣き声とともに「ママ」と叫んでいるようにも聞こえる声が時折認められた。

⑦まもなくSTが入室して抱きかかえ、あやそうとしてもまったくといっていいほど効果なく、ぐずり続ける。ただし、その際の泣き方は弱い。それでも最初の頃の泣き声よりも強まっているようにみえる。

⑧母親が再び入室すると、すぐに母親の方に接近して抱かれたが、それでもぐずり続け、訴えるような激しい泣き方は見られない。最初の母親再会時よりも積極的に母親の方に接近して抱かれている。ずっと抱かれていて下りようとしな。母親に抱かれると急速に泣きやんだのが印象的である。その後もずっと母親に抱かれていたが、両腕は母親にしがみつく姿勢を取らず、だらりと下げたままである。母親はずっと抱き続けてあやしていたが、T男を揺らしてあやすリズムがあまりにも性急で、時に横抱きにしてクルクル回したりする。ゆったりとしたあやし方にはなっていない。

#### 〈愛着パターンの評価〉

母子分離に対して弱々しいながらも不安を示し、母子再会によって情動不安は急速に消退している。Bタイプ(安定型)とみなせるが、T男の関係欲求をめぐるアンビバレンスは、母子分離と母子再会場面で顕著に認められている。情動不安の表出も弱々しく、かつ母子再会后、母親に抱っこされると途端に情動不安の表出が沈静化している。

〈ビデオフィードバック時の印象的エピソード〉

SSPの実施後、その様子を録画したビデオを

別室で両親と一緒に見て振り返ることになった。T男は両親と離れてスタッフと一緒に過ごすことを嫌がり、ずっと一緒にいた。われわれがビデオフィードバックをしている最中に、部屋の中を動き回っていたT男はビデオデッキに興味を示し、ビデオテープの挿入口に手の指を突っ込んだ。T男はすぐに手を引こうとしたが、指が蓋に挟まり取れなくなった。T男は一瞬おびえたような反応を示したが、激しく泣き叫ぶことはなかった。まもなく挟まった指はそばにいたスタッフの手助けにより抜くことができた。その直後、遠巻きにぎこちない歩みで母親の方に近寄っていった。しかし、母親に泣いて痛みを訴えることなく、驚いたことに母親が坐っていた椅子の背もたれの方に回って自分の頭をそこに打ちつけたのである。

#### 〈発達水準〉

初診当時測定された津守式発達検査で、全DQ113(運動150, 探索・操作92, 社会100, 生活習慣83, 理解・言語92)。正常域の発達水準である。

#### 〈臨床診断〉

将来的には高機能広汎性発達障碍に発展するリスクをもつ子どもであるが、接近・回避動因的葛藤(小林, 2000)に基づく関係の難しさが母子間の主たる問題であることから、関係障碍として捉えることが重要であると考えられた。

### V. 関係発達支援の経過

まずわれわれは、母親の強い不安をしっかりと受け止めることによって、T男の母親に対する関係欲求が表に出やすくなるように心がけた。そのため主に女性共同援助者(FTH)(共著者井上)が母親の話し相手を、男性共同援助者(MTH)(共著者稲岡)がT男の遊びの介助役を担当した。セッション全体の総括的役割は主援助者(筆頭著者小林)が担った。

最初の頃、T男は電車を並べたり、ボールを転がしたり、短時間で次々に遊びは変わっていた。その時のT男の動きを見ていると、楽しんでいるとは感じられず、ただ何となく玩具を

扱っているように見えた。そんなT男の動きに父親も母親もただ遠くから見つめるだけでどうかかわっていいかわからず、いつも重苦しい空気が漂っていた。

第3回、遊びの途中で、T男は滑り台に興味を示し、滑り台の下から上へ、反対方向から登り始めた。T男がなかなかうまく登れない様子を見て、母親はT男の靴下を脱がせてやった。すると、T男は機嫌よく登り始め、夢中になった。そんなT男の反応を見てうれしくなったのか、両親はT男に積極的に関わり始めた。T男の様子を少しの間見ている、うまく登れないT男を母親は抱き上げてやり、一番上に乗せ、滑り台を滑らせてやった。それを両親は数回繰り返した。両親はT男と一緒に遊べたことがうれしかったようであったが、T男はなぜか滑った直後、突然不快そうに「んーんー」とうなり声を発しながら滑り台に頭を数回自分で打ちつけた。

初めの数回は母親もいまだ不安と焦燥感が強く、T男は母親の接近に対して回避的態度が顕著であったが、第4回のセッションの頃から次第にT男の関係欲求は顕在化して、母親に甘えるようになっていった。

#### 第6回(1カ月半後)

T男の発声が、情動の変化(快/不快)をよく反映しているので大変わかりやすくなってきた。全身の動きにもよく反映している。それとともに母親を積極的に求めることが増えてきている。

母親の身体の動きが随分となめらかになってきた。母親は冗談を言ったりして明るい話題を話すまでになってきた。子どもの遊びに侵入的な関与は影を潜め、見守るようなゆとりのある態度に変わってきた。まるで別人ではないかと思わせるほどの落ち着きぶりである。母親も生き生きと動き回って子どもにつき合っている。

絵かきボードのペンをT男が引っ張り回していた。この時の母親の対応には以前と今回では顕著な違いが認められた。初期の頃には母親はペンをT男の手に取らせて描き方を教えようと

していたが、今回はT男がボードを引っ張り回して遊んでいる様子を見て、母親も嬉しそうに見守っている。

これと同様の母親の関わりが、揺りかごにT男が乗っていた際の対応にも明確にみとれた。以前であれば、立ち上がった時にかごが揺れるのをなにか面白がって楽しんでたT男に対して、無理にかごに坐らせて揺らしてやろうとしていた。しかし、今回はかごに乗っていたT男に対してさり気なくT男を支えているだけで、母親の方から無理に子を動かそうとしなくなっている。

最初の数回では、子どもが今の遊びのどこにどのよう心奪われているかを感じ取るゆとりもなく、母親は玩具を教条的に扱いながら子どもに誘いかけていたが、その後次第に子どもの楽しんでいる様子を見ながら、それに適切に合わせてかかわることができるようになっていく。母子間の情動調律の改善によって、T男が何を求めているか、あるいはT男が何をやろうとしているかを感じ取りながら、母親はT男の意図に沿った対応ができるようになっていく。

同じく第6回のセッションの後半、T男は歩き回っている時にはずみで転び、額を強く打ちつけてしまった。そばにいた主援助者がすぐにT男を抱き上げると、T男はいやがって降りて、母親の方に行って抱かれた。甘え泣きをするわけではないが、すぐに母親の方に行って抱かれたがったのはとても印象的であった。

驚かされたのはT男がつぎのような行動を取ったことである。さきほどまで抱かれていた母親からおりて、額を打ちつけた床のところまで行って、なんとなくわざとらしく(半意図的に)その床のところに額をゆるく打ちつけ、そのあと頭をおもむろに上げてニコニコしているのである。そのあと、すぐに母親がそばに寄っていくと、母親に向かって手を差し出して抱っこを要求する。ふたたび母親から降りて、床に額を打ちつけるというよりも、さきほどよりもさらにゆっくりと床に額をくっつけていた。

#### 第7回

1週間前発熱のために休んだ。38度台の発熱であったが、これを契機に母親への甘えが一段と強まっていった。夜間睡眠中、頻回に目覚めては母親に母乳を求め、母乳を飲むと穏やかになり、安心して再び寝入る。このような反応が1時間ごとに繰り返して起こる。母親にべったりと身を委ねるようになってきた。しっとり抱かれるようになった。

このセッションではずっと不機嫌で、母親に抱かれたがることが多い。母親に抱かれていると落ち着くが、母親から下りて離れると、落ち着かず不機嫌になり、泣いては母親に抱っこを求めている。家でも母親の姿が見えなくなると、激しく大泣きするようになってきた。

ただ時折、抱っこされたままさかんに何かに向かって腕を突き出し、何かを扱いたい様子である。母親は根気強くT男につき合っている。しかし、T男は明確にある物を扱いたくて腕を差し出しているというよりも、とにかく母親に自分の手足になって動いてもらうことでもって安心して満足しているように見える。興味をもった物が見つかり、母親から降りてしばしその物を扱っているが長続きせず、すぐにまた母親に抱っこをせがむ。抱っこをせがむ時も、はっきりと「ママ」と甘えた声を出している。母親を巻き込んで甘えることで、今の自分の不機嫌な気持ちを治めようとしているようである。

#### 第8回（2カ月後）

前回とは打って変わって元気よく活発に遊ぶ。好奇心が旺盛で、何かにつけて母親に頼りながら、新しい世界を探索している。興味をそそる物があるとひとりでそれに接近せず、必ず母親と一緒にいくようにせがむ。母親に抱かれながら移動する。母親が何か用事で少しでも離れると、後を追うようにしてついてゆく。前回まではぐずったような声を出すことによって不快な気持ちを示しているだけであったが、この回では自分の気持ちを直接分かりやすい行動で示すようになってきた。ただ印象的なことは、T男自身次々に周りの物に興味を引きつけられ、物に向かって腕を差し出しているが、明確

に何に興味があるのか漠然としていてまだ母親もはっきりとはつかみかねている。物に向かって人差し指を差し出すのではなく、腕全体、というよりも全身を物に向けて差し出そうとする動きに、そのことがよく反映しているように見える。

そのことをより明確に示すエピソードがセッションの半ばに認められた。次々にMIUにあるいろいろな玩具を手当たり次第扱っていたが、ある時ゆりかごの方に近づき、母の手を借りて乗ろうとする。多少こわばった表情をしながらも母親の支えでどうにか腰掛けて揺れるのを楽しみ始めた頃である。FTHの方に突然左腕を差し出して、不明瞭だが「おいで」と聞こえるような抑揚の声を発した。自分の方に注目してほしい、自分の心地良さを分かち合ってもらいたいという気持ちの現れなのであろう。ここでは何をしてほしいという明確な意図があったわけではなく、ただ今の自分の気持ちを他者と共有したいという思いからの自己表現のように思われる。このように、T男は自分の気持ち（関係欲求）をはっきりと他者に向けて表すようになったのが印象的である。

しかし、興味深いことには、この時T男はFTHに自分の方に注目して欲しかったのだが、あまりそばに近寄られるのは嫌な様子で、FTHが手を差し出そうとすると嫌そうな様子を見せている。初回のSSPの際に、T男は初対面のST（FTHと同じ人物）に対してまるで気遣うようにしてフープを手渡していたことを思い起こすと、FTHへの対人的構えに大きな変化が起こっていることがわかる。

#### 第9回

好機嫌。活発でよく笑う。遊びも幅広く、いろいろと試みている。ほとんどの遊具に手を付ける。非常に活発で楽しそうに遊んでいる。くるくるスロープで子がボールを繰り返し転がしている時、MTHが手を出してボールを手渡そうとすると、そのボールを放り投げた。お絵かきボードでなぐりがきしている時、母親がそれを消そうとしたら、それを妨げるようにして怒



る。隣の部屋に行きたそうにしているのを母親が制止してやめさせようとする怒る。何か他の遊びに誘ったり、他の物を示しても、はっきりイヤと首を振る。自分の思い通りにしたいというよりも、自分のやりたいことに対して少しでも妨げられそうになることに対して、明確に拒否の感情を示すようになっていく。

以前であれば、あれこれ子が周囲の物に関心を示して、指を差し出しても、何となく何をどうしたいのか、漠然としか捉えがたかった。しかし、今では自分が何にどのような関心を持っているか、とても明瞭になってきた。T男の行動の意図がはっきりしてきた。よってわれわれもT男の気持ちがとてもよく理解できるようになる。

隣の部屋に行きたい欲求が高まり、母親が行かせまいとして気を紛らわせようとするが、いつまでもあきらめず、不機嫌になってくる。葛藤が強まってくる。以前ならばここで頭を打ちつけるなどの行動(障害)を示していたが、この時は母親におっぱいをせがみ始めた。母親がおっぱいをやると次第に気持ちが治まり、最後には母親に抱かれたまま寝入ってしまう。

第10回

自己主張が強まってきた。感情表現も明確になってきた。思うようにいかないときずがるが、母親のおっぱいをしゃぶることで機嫌を取り戻すことができる。遊んでいて楽しいことがあると、MTHの方をちらちらと見回し、自分に注目してもらいたい様子である。自分の思い通りに遊びたい様子で、母親が不用意に近づくと、来るなど明確に自己主張して拒否する。しかし、自分がどこかに行こうとする時には必ずといっていいほど母親について来るようにと要求している。

当初母親に対して回避的傾向が薄らいでいた時でも誰かがMIUの部屋に入ってくると、すぐに敏感に反応し、警戒的な態度を示していたが、この頃になると、そのような過敏な反応は随分和らいだ。

以後も順調な経過を辿っていくが、以下は本

論のテーマである身振りに関連するエピソードのみ列挙する。

第14回(3カ月半後)

先日、友人の披露宴があった。当初母親はT男が落ち着いていることができるかどうか心配であったが、おとなしく坐り、さらには花嫁の入場の際にみんなが拍手をして花嫁を迎えた時、T男もつられるようにして一緒に拍手をした。T男の意外な反応を目にして母親はとてもうれしかったという。そのことを早速次回のセッションで母親が話してくれた。すると、その話を聞いていたT男は実にタイミングよく両手で拍手を繰り返す、このようにしたよとも言いたい様子であった。

第17回(4カ月半後)

先日、風船が突然破裂して、とても驚いたことがあった。以来、母親が「ふうせん(風船)」と言うと、T男は必ず両手を叩いてパーンと風船が破裂した様子を再現するようになった。MIUで母親がそのことを話していると、T男はその話に合わせて両手でパチンと叩いて、同じように表現している。

第27回(8カ月後)

母子ふたりで水族館に出かけ、タコ、カメなどいろいろな動物を見て楽しんだ。数日後、MIUで水族館に行った話を母親がし始めると、すぐに全身を使って実に器用にタコやカメの動くさまを表現している。タコのくねくねとした動き、カメが床にはいつくばってゆったりと動く様子、イルカが泳いで飛ぶ様子など、生き生きと全身でいかにも嬉しそうに表現している。

支援の全経過は33回を数え、期間はほぼ1年であった。遠方に転居となり、その後は不定期な経過観察が継続されている。

VI. 考察

1. 関係障害によってもたらされる行動(障害)

1) 子どもにみられる関係欲求をめぐるアンビバレンス

生育歴や初回時のSSPで認められた母子間の関わり合いの特徴は、養育者にとって関わり

にくい子どもたちに共通してみられるものである。T男には母親に対する強い関係欲求(甘え)が潜在的にあることは確かであるが、なぜか母親といざ関わり合おうとすると、回避的になってしまっている。そのため母子関係はなかなか深まっていけない。このような関係のむずかしさが生まれると、母親の焦燥感や不安感はますます強まり、それがさらに両者の関係を難しいものにしていく。その起源にはT男の母親に対する関係欲求をめぐるアンビバレンスがある。このようなアンビバレンスは恐らく彼らが生来的に持っている〈知覚-情動〉過敏に基づくものと考えられる(小林, 2005a)。

## 2) 葛藤行動としての注意転導

対人関係の成立に困難さを示す発達障碍の子どもたちにみられる関係欲求をめぐるアンビバレンスは、養育者との愛着関係の成立を困難にし、彼らの強い葛藤は種々の行動障碍をもたらすことになる。具体的には、かんしゃく、注意転導、こだわり行動、自傷、衝動的・攻撃的行動などである(図3)(小林, 2005a)。本事例でも同様の行動障碍を認めることができる。

そのひとつは、SSPでの母子再会に際してT男が母親に対して見せた微妙な反応である。母親がいなくなると、T男に不安な気持ちがあ

どん高まっていることは手に取るようにわかるが、母親を追い求めて強く自分を主張することはない。どこか回避的な態度が目立っている。そのもっとも印象的な反応が母子再会場面での母親に対して示した注意の向け方の変化である。

母親と再会してうれしかったことは確かであろうが、なぜか母親が子どもを抱き寄せようとすると、途端にT男の注意はSTの方に移り、まるでもう母親への思いは消えたかのような態度を示している。激しく母親を求めようとしない。

このような注意転導といえる反応も動因的葛藤行動の一つであるが、ここで重要なことは、この反応は当事者が意識的に行っているものではないことである。さらに、注意転導が引き起こされるとともに、さきほどまでT男に認められた母子分離によって誘発された不安感という不快な情動の興奮も急速に冷めていっていることは興味深い。

## 3) 葛藤行動としての自傷

次に取り上げねばならない葛藤行動が、SSP後のビデオフィードバック時の印象的なエピソードに示されている。

ビデオデッキに指を突っ込んだため、指が取れなくなったT男は強い不安に襲われたのであ

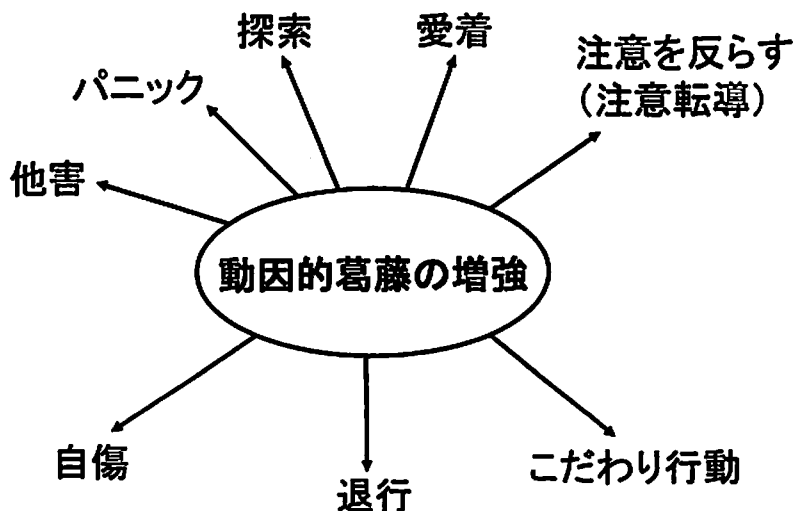


図3 動因的葛藤行動(小林(2000)を一部改変)

ろうが、その場ですぐに泣き叫んで母親の助けを強く求めることができない。それでも母親の方に接近していったが、そこでも母親に甘えることはできず、椅子の背もたれに頭を打ちつける自傷という行動(障碍)で反応している。心細い状態にあっても直接母親に甘えることができないために、葛藤は急激に強まった結果、このような行動が引き起こされているのである。

さらに、自傷にまつわる印象的なエピソードが第3回のセッションでも認められている。

両親と一緒に楽しそうに滑り台で遊んでいたT男が滑り台を滑った直後に俯けになったまま頭を台に打ちつけている。ビデオフィードバック時に見せた自傷と同質の行動である。親はT男に対してよかれと思ってT男を抱きかかえて滑り台の上に乗せてやって滑り台を滑らせてやったのであるが、T男は不快な思いを体験しているのである。

T男は滑り台を反対方向から全身を使って懸命になって登っていた。その際の全身で感じ取っていたある種の手触りを楽しんでいたであろう。しかし、両親はT男が滑り台をうまく滑れるようにとの思いから、滑り台の上に乗せてやってT男に滑ることの面白味を体験させてやろうとした。滑り台という遊具はまさにそのような目的をもって作られたものだから、両親の取った行動は常識的な感覚からすればさほどの違和感はないかもしれない。しかし、T男が「いま、ここで」この遊具を用いて何をどのように楽しんでいるのか、そのことがこの時の両親にはなぜか感じ取ることが困難であった。子どもと親とのあいだにどこか遊び方をめぐって大きなズレが起こっている。親の意向と子どもの思いとのあいだにズレが生まれていたのである。

よく考えてみると、このようなズレは子どもとわれわれとのあいだでは日常的に起こりがちなことである。ただ、この事例では早期からの関係障碍を基盤にしたこのようなズレが日常的に連続して起こっていたために、両者の関係がいよいよ深刻さを帯びていったのではないかと推測される。

## 2. 原初的知覚様態と身振りの原初的形態

### 1) 原初的知覚様態とは

原初的知覚様態とは、視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚などの五感に分化する以前の未分化な知覚様態のことで、そこでは各モダリティ間の通底性が際立つとともに、知覚対象(客体)と知覚する主体が明確に分節化されることなく、両者が融合したかたちで体験されるという特徴をもつ。そこで生まれる心的過程は、運動過程、知覚過程、情動過程などが各々別個の独立したものとしてではなく、それらが一体となった原初的母胎からの相同的な機能発現としてとらえなければならない(Werner, 1948)。よって、そこでの体験様式はこのような原初的知覚様態に基づく〈運動—知覚—情動〉体験、すなわち未分節な心的過程による体験という独特な性質をもつということである。

### 2) 原初的身振りの発現

身振りの原初的形態を論じるにあたりもっとも重要なエピソードが第6回に認められている。

楽しそうに歩き回っている時にT男ははずみで転んでしまい、額を床に強く打ちつけたが、母親に抱かれてすぐに穏やかになっている。ただ、次に取ったT男の行動は非常に興味深いものであった。

抱かれていた母親からすぐに降りて、さきほど額を打ちつけた床のところまでわざわざ行き、いかにもわざとらしく床に額を打ちつけ、顔をおもむろに上げた。母親がそばに寄っていくと、母親に向かって手を差し出し抱っこされた。そのあと、ふたたび母親から降りて、床に額を打ちつけたが、さきほどよりもさらにゆっくりと額を床にくっつけ、ニコニコしながらこちらの方を眺めていたのである。

このエピソードの持つ意味を考える上で重要なことは、当初は母親に甘えたくても甘えられない葛藤から頻りに頭を壁に打ちつけていたが、母子関係が修復されてT男は母親に盛んに甘えるようになった頃の出来事であるという点

である。T男が床に頭を打ちつけた時は痛みを感じたであろうが、その瞬間周囲の大人が一斉に彼の方に注目して大丈夫かと声を掛けていた。T男にはその時に浴びた視線や母親に抱っこされたことがいたく心地良かったのであろう。心地良かった体験を再現したくて、なかばわざとらしく頭を床に打ちつけたと推測されるのである。

関係発達支援開始前のT男に顕著に認められていた注意転導ないし視線回避行動からも伺われるように、他者から注がれる視線は、T男にとって当初はけっして心地良いものではなかった。しかし、母親との愛着関係の深まりによって安心感が生まれ、それとともに他者からの視線が心地良い刺激へと劇的な変容を遂げている。不安か安心かといった情動のありようや知覚のありようがいかに不可分に関連して機能しているかをよく教えてくれる。

### 3) 原初的知覚様態とその体験様式

T男にとって周囲のみんなから関心や視線が注がれ、母親に抱っこをされたことが心地良かったことは容易に理解されよう。ただここでぜひとも問題として取り上げたいのは、なぜT男は先ほど頭を打ちつけた場所にわざわざもどって頭を床に打ちつけるという行動をとったのかということである。心地良かった体験を再現したいという欲求からの行動であるとしても、その欲求をなぜわざわざ先ほどと同じ場所で頭を床に打ちつけるという行動で示されなければならないのかという問題である。

この時彼は〈転んで床に額を打ちつけたこと〉、〈その時に痛みを感じたこと〉、〈みんなの関心や視線を浴びて心地良かったこと〉などを、渾然一体となった形でアクチュアルに体験したのであろう。彼にとってこの心地良かった体験は、まさに〈あの場所の床に額を打ちつけて痛かったが、みんなの注目を浴びたことが心地良かったという〉体験として記憶されたのである。つまりはこの時の〈心地良かったという〉体験は、文脈に強く規定されていたために、彼にと

って〈心地良い〉体験をもう一度再現したいという動因によって引き起こされた行動は、まさに先ほどと同じ体験を繰り返すことであったのである。

われわれであれば、〈床に転んで痛かったけど、みんなの視線を浴びて心地良かった〉という体験の意味として〈床に転んで額を打ったこと〉〈視線を浴びたこと〉〈心地良かったこと〉などとして、アクチュアルな体験を分節化して、その中で最も重要な意味を取り出すということを経験的に考えるであろう。しかし、この時のT男にとっては未分節な融合的な体験として記憶され、その中で不意に〈床に頭を打ちつけたこと〉が彼にとっては強く情動を揺さぶられた体験としてもっとも印象的なものとして記憶されていた。そのため、先ほどの体験の再現欲求が高まると、それを最も象徴するものとしての〈(先ほどと同じ)床に頭を打ちつける〉という行動でその欲求が示されたのではないかと考えられる。このような動因に基づく行動であったがために、さきほどのような痛い思いをするほどに頭を打ちつけることなく、わざとらしい行動、つまりはなかば意図的(半意図的)に取った行動とみなすことができるのではないかと思われるのである。

### 4) 葛藤行動としての行動と自己表現としての行動

初期にみられたT男の行動障害としての〈頭を打ちつける〉自傷と、今回見られた〈床に頭を打ちつける〉行動のあいだの質的差異について考えてみよう。母親に対する関係欲求をめぐる強いアンビバレンスによる〈頭を打ちつける〉という初期の彼の行動は典型的な葛藤行動であるゆえ、行動障害としての自傷として捉えることができる。

しかし、その後に見られた〈床に頭を打ちつける〉行動は、周囲のみんなの注目を浴びたいという欲求(関係欲求)に基づいた半意図的行動である。つまりは後者の行動は葛藤行動ではなく、自らの欲求に基づく自己表現としての行

動として捉えることができる。それを可能にしているのは、母親への関係欲求をめぐるアンビバレンスの緩和によって、母親を求める気持ちが直接的に表現されやすくなったことにある。

彼は心地良かった一連の〈運動—知覚—情動〉体験の中でもっとも強烈に記憶され象徴的であったのが〈床に頭を打ちつけた〉行動なのである。そのため、再び関係欲求(みんなに注目されたい気持ち)が高まると、心地良かった体験を象徴する〈床に頭を打ちつけた〉行動でもってその気持ちを表現したと思われるのである。自分の気持ち(意図)をなんらかの行動(身振り)でもって示しているという意味でコミュニケーション行動とみなすことができるが、その気持ちの表現の方法が原初的知覚様態に深く根ざしたものであることから、ここにみられたT男の行動は身振りの原初的形態として捉えることができると思われるのである。

5) 身振りの原初的形態の意味と文脈依存性

身振りの原初的形態としてT男の〈床に頭を打ちつける〉行動を捉えてみると、その行動の意味を理解するためには、その行動が生じた文脈全体、つまりはその場で何がどのようにして

起こったのか、当事者たちはそこでどのような心的体験をしたのか、といったことを把握することが求められる。つまり、この原初の段階での行動(身振り)の意味は極めて文脈依存的であるということがわかる(図4)。そのため、子どもがある行動を示した場合、われわれがその意味を考えるにあたっては、過去に類似の体験をどのようなところでどのような場面で行ったのかを理解することがぜひとも必要になる。そうしなければ彼らの行動の真の意味を理解することはほとんど不可能である。あることを表現したいという意図的行動、すなわち身振りを自ら示すようになるためには、初期段階でいかに彼らの何気ない行動の中に潜んでいる動因(気持ちの動き)を感じ取った上でかかわることが大切かということはこのエピソードは示唆している。

6) 身振りの原初段階ではその表現型に目を奪われてはならない

このように身振りの原初的形態の特徴を考えていくと、その表現型をその一般的な意味合いで受け止めてはいけないということを教えられる。T男の〈額を床に打ちつける〉行動の意図

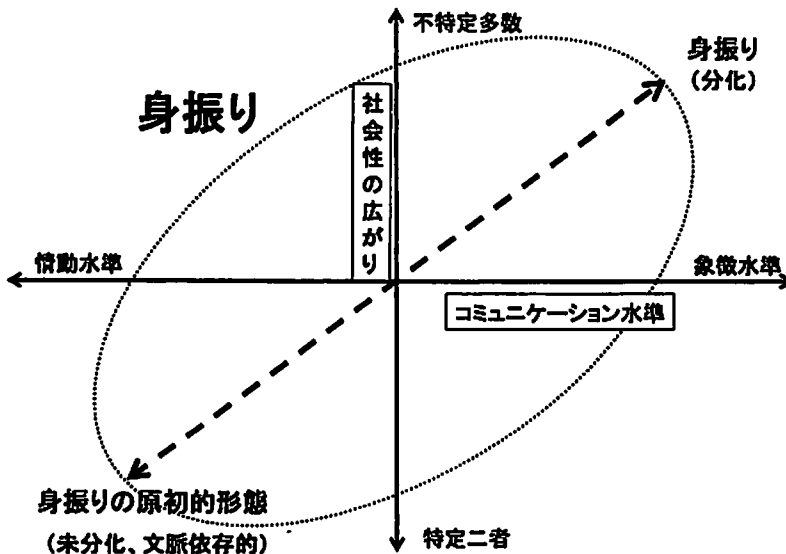


図4 身振りとコミュニケーション水準との関係

表1 〈頭を打ちつける〉行動の比較

行動の出現時期	関係発達支援前	関係発達支援後
行動の特徴	(滑り台、椅子の背もたれに)強く 〈頭を打ちつける〉	緩やかに〈頭を打ちつける〉
動因の特徴	葛藤の亢進	葛藤の緩和, 関係欲求の亢進
コミュニケーション 水準	情動的コミュニケーション	情動的コミュニケーションから象徴的 コミュニケーションへの過渡的過程
意識過程の介在	意識が介在しない	なかば意識が介在している
コミュニケーション の意図	意図はない	半意図的

(動因)が何かを考えることは、子どもの行動の意味を理解することであるが、その際、〈額を床に打ちつける〉という負の(ように見える)行動に目を奪われてはならないということである。そのような行動がどのような場面でどのような文脈の中で体験されたのかをまずは理解すること、そのことによって初めて彼の気持ち(動因)を理解することが可能になっていくのである。

さらに忘れてはならないのは、子どもの動因そのものが行動にストレートに表現されるためには動因そのものの葛藤が緩和されていることが不可欠であるということである。関係欲求をめぐるアンビバレンスがいかに彼らの発達総体に深く影響を及ぼしているかを痛感させられる。

以上述べたように、〈頭を打ちつける〉行動がその際の動因の特徴によって大きく異なることが示されているが、関係発達支援前後でその行動が質的にどのように変化したかを比較して表1に示す。両者の行動の性質を比較すると、コミュニケーション水準、意識過程の介在の有無、コミュニケーションの意図の有無などにおいて大きな質的差異のあることがわかる。

### 3. 身振りの原初的形態のその後の変容過程

次に、初期の段階で認められた身振りの原初的形態は、その後どのように変容していったかを検討してみよう。

最初の頭を打ちつけるという行動によって周

囲の人々に注目されたいという欲求を示していた頃のT男の関係欲求は次第に母親とのあいだで充足されていく。すると自己主張が強まっていき、自分が何かをしようとしている時に手を出されることに対して強い怒りの感情を表現するまでになっている。母親との間で安心感が育まれていくことによって、次第に周囲の世界への関心が高まっていく。その過程で、いまだ母親への関係欲求が強い段階では、対象への関心のあり方は漠としてものであるが、その後急速にT男自身の外界の対象への関心は明確になっていく。そこではT男の身振り行動にも大きな変化が生じていくことがわかる。愛着形成にもとづく第二次間主観性の成立がなんらかの対象をめぐる母子間で関心や興味の共有を容易にし、急速にT男の対象に対する関心の向け方はわれわれのそれと同じようになっていくとともに、T男はその対象の特性を分かりやすい全身の動き vitality affects (Stern, 1985) で表現するようになっていく。

身振りの原初的形態が原初的知覚様態にもとづく体験様式に深く根ざしていることをみてきたが、その後の身振りの変容過程においても、風船の割れる様 vitality affects を、手で叩くことによって示したり、新郎新婦の入場の際のみんなの拍手を演じたりしている様を捉えると、同じように vitality affects を通した体験記憶が鮮やかに再現されている。さらに大切なことは、それと平行して、当初は漫然としていた彼の対象への関心の向け方が、その後次第に鮮明

化し焦点化していくことによって、動物の動きを的確に再現することができるようになっていく。このようにして彼の対象世界で興味の対象が地としてより鮮明に浮かび上がり、分節化へとつながっていく。その結果、われわれの対象の捉え方と共通の特徴が身振りの行動となって表現されるようになっていくのである。

このようにみていくと、非言語的コミュニケーションの媒体としての身振りの分化(分節化)の過程を促進していく大きな要因は、われわれとの対象への興味や関心の共有にあることがわかるが、それを可能にしたのは母子間の愛着形成に基づく第二次間主観性の成立である。身体あるいは情動を主体とした原初的コミュニケーション世界にあって、*vitality affects* を介して母子間、あるいは興味や関心の対象のもつ動きが子ども自身の身体に共鳴し、それが子ども自身の身体の動きとして表現される。それを生み出す大きな力となっているのが原初的知覚様態である *vitality affects* である。原初的コミュニケーション世界が生み出す身振りの原初的形態はこのようなプロセスを経て生起してくると思われるのである。

## Ⅶ. おわりに

身振りの原初的形態を考えていくと、原初的コミュニケーション世界において、われわれは彼らの気持ち(情動)のありようを大切にするとともに、主体的に自らの感性を駆使して関わり合うことの重要性が浮かび上がってくる。子どもの主体性ともにかかわるわれわれ自身の主体的関与も求められているということである(小林, 2005b)。ここにこそわれわれが関係発達臨床と称している大きな根拠がある。

これまで発達障害臨床においては、行動(障害)に焦点を当て、それを好ましい行動へ変えていく、あるいは好ましい行動を身につけさせていくという接近、すなわち子どもに「(何かを)させる」という当事者の主体をないがしろにした働きかけが目立っていた。本論でわれわれが明らかにしたことは、障害された行動(不適応

な行動)を外から変えていくのではなく、内(主観, 気持ち)から変えていくという働きかけ、つまりは当事者の主観(主体) *subject* を大切にしたい働きかけの重要性である。社会的行動がどのような発達過程を経て獲得されていくのか、その成り立ちに基づいた接近は、発達障害に対する対症療法的なものではなく、発達そのものの本質を踏まえた発達支援につながっていくのではないと思われる。

最後になるが、われわれは本事例を通して、発達障害に対する関係発達支援の効果論じようとしたものではないことを改めて述べておきたい。本論の中ですでに論じたように、発達障害の子どもたちに認められる種々の能力障害は、養育者を初めとする他者との濃密な関わり合いの体験とその基礎障害とが絡み合うことによって形成されることから、本事例に限らず、彼らに顕在化した障害(症状)が一時的に軽快あるいは消退したとしても、その後の生涯過程で再び形成されたり、増悪する可能性は十分にあり得ることである。よって、発達障害臨床に従事するわれわれは、本事例などの発達障害の子どもたちが今後待ち受けているさまざまなライフステージでいかなる発達課題に直面し、それにどのように対処していくか、彼らの育ちの過程をこれまでと同様に、われわれとの関係の有り様を軸に今後も丁寧に見守っていくことが求められていることを強調しておきたいと思う。

なお、筆頭著者小林は小林ら(2005)の論文から「障害」を使用しているが、それ以前の論考では「障害」を用いている。そのため文献には二つの用語が混在していることをお断りしておく。

本稿に対して貴重な助言をいただいた鯨岡峻氏(前京都大学大学院人間・環境学研究所教授、現中京大学心理学部教授)に深謝します。

最後に、本事例の報告にあたり、承諾をいただきましたT男くんのご家族に厚くお礼申し上げます。

本研究は東海大学健康科学部特別研究助成(2005)によっている。

本稿の要旨は第45回日本児童青年精神医学会総会(2004.11.03.-11.05.名古屋市)にて発表された。

### 文 献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. et al. (1978): *Patterns of attachment: A psychological study of strange situations*. Hillsdale, Lawrence Erlbaum Associates.

柏木恵子, 古沢頼雄, 宮下孝広(1996): 発達心理学への招待. 京都, ミネルヴァ書房.

鯨岡 峻(2005): エピソード記述入門—実践と質的研究のために—. 東京, 東京大学出版会.

小林隆児(2000): 自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—. 京都, ミネルヴァ書房.

小林隆児(2001): 自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近—. 東京, 岩崎学術出版社.

小林隆児(2004): 自閉症とことばの成り立ち—関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界—. 京都, ミネルヴァ書房.

小林隆児(2005a): 自閉症の三重大行動特徴をどのよう

に理解するか. 小林隆児, 鯨岡 峻(編著): 自閉症の関係発達臨床(pp. 58-64). 東京, 日本評論社.  
小林隆児(2005b): 主体性をはぐくむことの困難さと大切さ—幼児期と青年期をつなぐもの—. *そだちの科学*, 5, 35-41.

小林隆児, 鯨岡 峻(2005): 自閉症の関係発達臨床. 東京, 日本評論社.

Stern, D. (1985): *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. New York, Basic Books. (小此木啓吾, 丸田俊彦監訳, 神庭娟子, 神庭重信訳(1989/1991): 乳児の対人世界 理論編/臨床編. 東京, 岩崎学術出版社.)

Sullivan, H. S. (1954): *The psychiatric interview*. New York, W. W. Norton. (中井久夫, 松川周悟, 秋山 剛ら訳(1986): 精神医学的面接. 東京, みすず書房.)

Werner, H. (1948): *Comparative psychology of mental development*. New York, International University Press. (鯨岡 峻, 浜田寿英男訳(1976): 発達心理学入門. 京都, ミネルヴァ書房.)

## SOME CONSIDERATIONS ON THE MEANING OF PRIMITIVE GESTURE IN THE CASE OF A 12-MONTH-OLD BOY WITH HIGH RISK OF HIGH-FUNCTIONAL PERVASIVE DEVELOPMENTAL DISORDER

Ryuji KOBAYASHI

*Department of Social Work, Tokai University School of Health Sciences*

Reiko INOUE

*Department of Nursing, Tokai University School of Health Sciences*

Isao INAOKA

*Komae Nonbiri Clinic*

Problems with communication noted in the developmental disorders have basically been captured as a disability pertaining to the individual capabilities of the child, with modes of support being designed from the standpoint of how to enable the child to acquire the capacity for communication.

Normally, communication is divisible into the verbal and non-verbal forms of communication, functioning through the media of the spoken word and gesturing. Various methods have been developed to date as strategies for supporting communication to endow children with verbal language and gesturing. How-



ever, in such endeavors, the developmental process of how such media for communication is acquired through the accumulation of interpersonal exchange between the child and surrounding persons starting with the immediate caregiver has rarely been subject to examination.

The purpose of this manuscript is to examine the meaning of primitive gesture that appeared in the case of a boy with developmental disorder. The subject selected for the review was a 12-month-old boy and his caregiver with severe problems in attachment formation between mother and child, seen as being at risk of high-functioning pervasive developmental disorder. Capturing the case as a relationship disorder between mother and child, the authors became clinically involved from the standpoint of supporting relational development.

Self-injurious behavior (disturbance) arising from motivational conflict noted early in therapy gradually subsided with alleviation of the ambivalence surrounding relational needs. Interestingly, diminution of the behavior (disturbance) arising from the conflict was replaced soon after by the appearance of pseudo-self-injurious behavior, as a form of self-expression based on relational needs. The manifestation started from the pleasant experience of becoming the focus of attention and being cuddled by the mother upon accidentally hitting his head against the floor. The wish to reenact the experience grew strong, leading to appearance of the act of "banging his head on the floor" as his mode

of expression. A close association was surmised to exist between the primordial mode of perception and the mode of experience in this instance. A characteristic of such primordial modes of gesturing is the difficulty of capturing their meaning due to high context-dependency, making the gestures understandable only through contextual interpretation. As such, it was shown that coming to understand the background within which such behavior occurred, together with the circumstances and content of the experience is indispensable for capturing their significance. Moreover, the process by which such primordial modes of gesturing undergo transition into regular gesturing was examined and presented together with the authors' views on the matter.

To date, strategies for supporting the developmental disorders have emphasized training through developmental tasks to enable the child to acquire various capabilities. However, the findings obtained on the generation process of gesturing in this study indicate the importance of clinical intervention focusing on the emotional state of the child, i.e., the developmental perspectives of the mind in addressing such disabilities.

Author's Address :

R. Kobayashi

Department of Social Work, Tokai University School of Health Sciences

143 Shimokasuya, Isehara, Kanagawa, 259-1193 JAPAN